妖術

泉鏡花

一

むらむらと四辺(あたり)を包んだ。鼠色の雲の中へ、すっきり浮出したように、薄化粧の艶(えん)な姿で、電車の中から、颯(さっ)と硝子戸(がらすど)を抜けて、運転手台に顕(あら)われた、若い女の扮装(みなり)と持物で、大略(あらまし)その日の天気模様が察しられる。

日中(ひなか)は梅の香も女の袖(そで)も、ほんのりと暖かく、襟巻ではちと逆上(のぼ)せるくらいだけれど、晩になると、柳の風に、黒髪がひややひやと身に染む頃。もうちと経(た)つと、花曇りという空合(そらあい)ながら、まだどうやら冬の余波(なごり)がありそうで、ただこう薄暗い中(うち)はさもないが、処を定め

ず、時々墨流しのように乱れかかって、雲に雲が累なると、ちらちら白いものでも交りそうな気勢がする。……両三日。
今朝は麗かに晴れて、この分なら上野の彼岸桜も、うっかり咲きそうなという、午頃から、急に吹出して、随分風立ったのが未だに止まぬ。午後の四時頃。
今しがた一時、大路が霞に包まれたようになって、洋傘はびしょびしょする……番傘には雫もしないで、俥の母衣は照々と艶を持つほど、颯と一雨掛った後で。
大空のどこか、吻と呼吸を吐く状に吹散らして、雲切れがした様子は、そのまま晴上りそうに見えるが、

淡く濡れた日脚の根が定まらず、ふわふわ気紛れに暗くなるから……また直きに降って来そうにも思われる。すっかり雨支度でいるのもあるし、雪駄でばたばたと通るのもある。傘を拡げて大きく肩にかけたのが、伊達に行届いた姿見よがしに、大薩摩で押して行くと、すぼめて、軽く手に提げたのは、しょんぼり濡れたも好いものを、と小唄で澄まして来る。皆足どりの、忙しそうに見えないのが、水を打った花道で、何となく春らしい。

電車のちょっと停まったのは、日本橋通三丁目の赤い柱で。

今言ったその運転手台へ、鮮麗（あざやか）に出た女は、南部の表つき、薄形の駒下駄（こまげた）に、ちらりとかかった雪の足袋、紅羽二重（こうはぶたえ）の褄捌（つまさば）き、柳の腰に靡（なび）く、と一段軽く踏んで下りようとした。

コオトは着ないで、手に、紺蛇目傘（こんじゃのめ）の細々と艶のあるを軽く持つ。

ちょうど、そこに立って、電車を待合わせていたのが、舟崎（ふなざき）という私の知己（ちかづき）——それから聞いたのをここに記す。

舟崎は名を一帆（かずほ）といって、その辺のある保険会社のちょっといい顔で勤めているのが、表向は社用につき

一軒廻って帰る分。その実は昨夜(ゆうべ)の酒を持越しのため、四時びけの処を待兼ねて、ちと早めに出た処、いささか懐中に心得あり。

一旦家(いったんうち)へ帰ってから出直してもよし、直ぐに出掛けても怪しゅうはあらず、またと……誰か誘おうかなどと、不了簡(ふりょうけん)を廻(めぐ)らしながら、いつも乗って帰る処は忘れないで、件(くだん)の三丁目に彳(たたず)みつつ、時々、一粒ぐらいぼつりと落ちるのを、洋傘(こうもり)の用意もないに、気にもしないで、来るものは拒まず……去るものは追わずの気構え。上野行、浅草行、五六台も遣過(やりす)ごして、硝子戸越(がらすどご)しに西洋小間(こま)ものを覗(のぞ)く人を透かしたり、横

町へ曲るものを見送ったり、頻（しき）りに謀叛気（むほんぎ）を起していた。

処へ……

一目その艶（えん）なのを見ると、なぜか、気疾（きばや）に、ずかずかと飛着いて、下りる女とは反対の、車掌台の方から、……早や動出（うごきだ）す、鉄の棒をぐいと握って、ひらりと乗ると、澄まして入った。が、何のためにそうしたか、自分でもよくは分らぬ。

そこにぼんやりと立った状（さま）を、女に見られまいと思った見栄か、それとも、その女を待合わしてでもいたように四辺（あたり）の人に見らるるのを憚（はばか）ったか。……し

かし、実はどちらでもなかった、と渠は云う。
乗合いは随分立籠んだが、どこかに、空席は、と思う目が、まず何より前に映ったのは、まだ前側から下りないで、横顔も襟も、すっきりと硝子戸越に透通る、運転手台の婀娜姿。

二

誰も知った通り、この三丁目、中橋などは、通の中でも相の宿で、電車の出入りが余り混雑せぬ。
停まった時、二人三人は他にも降りたのがあったろ

う。けれども、女に気を取られてそれにはちっとも気がつかぬ。

乗ったのは、どの口からも一帆一人。

入るともう、直ぐにぐいと出る。ト前の硝子戸(がらすど)を外から開けて、その女が、何と！

姿見から影を抜出(ぬけだ)したような風情で、引返して、車内へ入って来たろうではないか。

そして、ぱっちりした、霑(うるみ)のある、涼しい目を、心持俯目(ふしめ)ながら、大きく睜(みひら)いて、こっちに立った一帆の顔を、向うから熟(じっ)と見た。

見た、と思うと、今立った旧(もと)の席が、それなり空い

ていたらしい。そこへ入って、ごたごたした乗客の中へ島田が隠れた。

その女は、丈長（たけなが）掛けて、銀の平打の後（うしろ）ざし、それ者（しゃ）も生粋（きっすい）と見える服装（みなり）には似ない、お邸好（やしきごの）みの、鬢水（びんみず）もたらたらと漆のように艶（つや）やかな高島田で、強（ひど）くそれが目に着いたので、くすんだお召縮緬（めしちりめん）も、なぜか紫の俤立（おもかげだ）つ。

空（す）いた処が一ツあったが、女の坐ったのと同一側（おんなじがわ）で、一帆はちと慌（あわただ）しいまで、急いで腰を落したが。

胸、肩を揃えて、ひしと詰込んだ一列の乗客（のりて）に隠れて、内証で前へ乗出しても、もう女の爪先（つまさき）も見えなかっ

たが、一目見られた瞳（ひとみ）の力は、刻み込まれたか、と鮮麗（あざやか）に胸に描かれて、白木屋の店頭（みせさき）に、つつじが急流に燃ゆるような友染（ゆうぜん）の長襦袢（ながじゅばん）のかかったのも、その女が向うへ飛んで、逆（さかさ）にまた硝子（がらす）越しに、扱帯（しごき）を解いた乱姿（みだれすがた）で、こちらを差覗（さしのぞ）いているかと疑う。

やがて、心着くと標示（しるし）は萌黄（もえぎ）で、この電車は浅草行。

一帆がその住居（すまい）へ志すには、上野へ乗って、須田町あたりで乗換えなければならなかったに、つい本町の角をあれなり曲って、浅草橋へ出ても、まだうかうか。

もっとも、わざととはなしに、一帳場（ひとちょうば）ごとに気を注（つ）けたが、女の下りた様子はない。

で、そこまで行くと、途中は厩橋、蔵前でも、駒形でも下りないで、きっと雷門まで、一緒に行くように信じられた。

何だろう、髪のかかりが芸者でない。が、爪はずれが堅気と見えぬ。――何だろう。

とそんな事。……中に人の数を夾んだばかり、つい同じ車に居るものを、一年、半年、立続けに、こんがらかった苦労でもした中のように種々な事を思う。また雲が濃く、大空に乱れ流れて、硝子窓の薄暗くなって来たのさえ、確とは心着かぬ。

が、蔵前を通る、あの名代の大煙突から、黒い山の

ように吹出す煙が、渦巻きかかって電車に崩るるか、と思うまで凄（すさま）じく暗くなった。

頸許（えりもと）がふと気になると、尾を曳（ひ）いて、ばらばらと玉が走る。窓の硝子を透（すか）して、雫（しずく）のその、ひやりと冷たく身に染むのを知っても、雨とは思わぬほど、実際上（うわ）の空でいたのであった。

さあ、浅草へ行（ゆ）くと、雷門が、鳴出したほどなその騒動（さわぎ）。

どさどさ打（ぶち）まけるように雪崩（なだ）れて総立ちに電車を出る、乗合（のりあい）のあわただしさより、仲見世（なかみせ）は、どっと音のするばかり、一面の薄墨へ、色を飛ばした男女（なんにょ）の姿。

風立つ中を群(むらが)って、颯(さつ)と大幅に境内から、広小路へ散りかかる。

きちがい日和(びより)の俄雨(にわかあめ)に、風より群集が狂うのである。その紛れに、女の姿は見えなくなった。

電車の内はからりとして、水に沈んだ硝子函(がらすばこ)、車掌と運転手は雨にあたかも潜水夫の風情に見えて、束(つか)の間(ま)は塵(ちり)も留めず、——外の人の混雑は、鯱(しゃち)に追われたような中に。——

一帆は誰よりも後(おく)れて下りた。もう一人も残らないから、女も出たには違いない。

三

が、拍子抜けのした事は夥多（おびただ）しい。

ストンと溝へ落ちたような心持ちで、電車を下りると、大粒ではないが、引包（ひッつつ）むように細かく降懸（ふりかか）る雨を、中折（なかおれ）で弾（はじ）く精もない。

鼠の鍔（つば）をぐったりとしながら、我慢に、吾妻橋の方も、本願寺の方も見返らないで、ここを的（あて）に来たように、素直（まっすぐ）に広小路を切って、仁王門を真正面（まっしょうめん）。

濡れても判明（はっきり）と白い、処々むらむらと斑（ふ）が立って、雨の色が、花簪（はなかんざし）、箱狹子（はこせこ）、輪珠数（わじゅず）などが落ちた形に

なって、人出の混雑を思わせる、仲見世の敷石にかかって、傍目（わきめ）も触（ふ）らないで、御堂（みどう）の方（かた）へ。

そこらの豆屋で、豆をばちばちと焼く匂（におい）が、雨を蒸して、暖かく顔を包む。

その時、広小路で、電車の口から颯（さっ）と打った網の末（すそ）が一度、混雑の波に消えて、やがて、向（むき）のかわった仲見世へ、手元を細くすらすらと手繰寄せられた体（てい）に、前刻（さっき）の女が、肩を落して、雪かと思う襟脚細く、紺蛇目傘（こんじゃのめ）を、姿の柳に引掛（ひっか）けて、艶（つや）やかにさしながら、駒下駄を軽く、褄（つま）をはらはらとちと急いで来た。

と見ると、左側から猶予（ため）らわないで、真中（まんなか）へ衝（つ）と寄っ

て、一帆に肩を並べたのである。

なよやかな白い手を、半ば露顕(あらわ)に、翩然(ひらり)と友染の袖を搦(から)めて、紺蛇目傘をさしかけながら、

「貴下(あなた)、濡れますわ。」

と言う。瞳が、動いて莞爾(にっこり)。留南奇(とめき)の薫(かおり)が陽炎(かげろう)のような糠雨(ぬかあめ)にしっとり籠(こも)って、傘(からかさ)が透通るか、と近増(ちかまさ)りの美しさ。

一帆の濡れた額は快よい汗になって、

「いいえ、構わない、私は。」

と言った、がこれは心から素気(そっけ)のない意味ではなかった。

「だって、召物が。」

「何、外套(がいとう)を着ています。」

と別に何の知己(ちかづき)でもない女に、言葉を交わすのを、不思議とも思わないで、こうして二言三言、云う中(うち)にも、つい、さしかけられたままで五足六足(いつあしむあし)。花の枝を手に提げて、片袖重いような心持で、同じ傘(からかさ)の中を歩行(ある)いた。

「人が見ます。」

どうして見るどころか、人脚の流るる中を、美しいしぶきを立てるばかり、仲店前を逆らって御堂の路(みち)へ上るのである。

また、誰が見ないまでも、本堂からは、門をうろ抜けの見透(みとおし)一筋、お宮様でないのがまだしも、鏡があると、歴然(ありあり)ともう映ろう。

「御迷惑？」

と察したように低声(こごえ)で言ったのが、なお色めいたが、ちっと蛇目傘(じゃのめ)を傾けた。

目隠しなんど除(と)れたかと、はっきりした心持で、

「迷惑どころじゃ……しかし穏(おだやか)ではありません。一人ものが随分通ります。」

とやっと苦笑した。

「では、別ツこに……」と云うなり、拗(す)ねた風にする

りと離れた。

と思うと、袖を斜めに、ちょっと隠れた状(さま)に、一帆の方へ蛇目傘ながら細(ほっそ)りした背(せな)を見せて、そこの絵草紙屋の店を覗(なが)めた。けばけばしく彩った種々(いろいろ)の千代紙が、染(にじ)むがごとく雨に縺(もつ)れて、中でも紅(べに)が来て、女の瞼(まぶた)をほんのりとさせたのである。

今度は、一帆の方がその傍(そば)へ寄るようにして、

「どっちへいらっしゃる。」

「私?……」

と傘(からかさ)の柄に、左手(ゆんで)を添(そ)えた。それが重いもののように、姿が撓(しな)った。

「どこへでも。」

これを聞棄てに、今は、ゆっくりと歩行き出したが、雨がふわふわと思いのまま軽い風に浮立つ中に、どうやら足許もふらふらとなる。

四

門の下で、後を振返って見た時は、何店へか寄ったか、傍へ外れたか。仲見世の人通りは雨の朧に、ちらほらとより無かったのに、女の姿は見えなかった。

それきり逢わぬ、とは心の裡に思わないながら、一

帆は急に寂しくなった。

妙に心も更まって、しばらく何事も忘れて、御堂の階段を……あの大提灯の下を小さく上って、厳かな廂を……欄干に添って、廻廊を左へ、角の擬宝珠で留まって、何やら吻と一息ついて、雫するまでもないが、しっとりとする帽子を脱いで、額を手布で、ぐい、と拭った。

「素面だからな。」

と歎息するように独言して、扱いて片頬を撫でた手をそのまま、欄干に肱をついて、遍く境内をずらりと視めた。

早いもので、もう番傘の懐手（ふところで）、高足駄で悠々と歩行（ある）くのがある。……そうかと思うと、今になって一目散に駆出すのがある。心は種々（いろいろ）な処へ、これから奥は、御堂の背後（うしろ）、世間の裏へ入る場所なれば、何の卑怯（ひきょう）な、相合傘（あいあいがさ）に後（おく）れは取らぬ、と肩の聳（そび）ゆるまで一人で気競（きお）うと、雨も霞（かす）んで、ヒヤヒヤと頬（ほお）に触る。一雫も酔覚（よいざめ）の水らしく、ぞくぞくと快く胸が時めく……

が、見透（みとお）しのどこへも、女の姿は近づかぬ。

「馬鹿な、それっきりか。いや、そうだろう。」

と打棄（うっちゃ）り放す。

大提灯にはたはたと翼（つばさ）の音して、雲は暗いが、紫の

棟の蔭、天女も籠る廂から、鳩が二三羽、衝と出て翩々と、早や晴れかかる銀杏の梢を矢大臣門の屋根へ飛んだ。

胸を反らして空模様を仰ぐ、豆売りのお婆の前を、内端な足取り、裳を細く、蛇目傘をやや前下りに、すらすらと撫肩の細いは……確に。

スーと傘をすぼめて、手洗鉢へ寄った時は、衣服の色が、美しく湛えた水に映るか、とこの欄干から遥かな心に見て取られた。……折からその道筋には、件の女ただ一人で。

水色の手巾を、はらりと媚かしく口に啣えた時、肩

越に、振仰いで、ちょいと廻廊の方（かた）を見上げた。

ののめのめとそこに待っていたのが、了簡（りょうけん）の余り透く気がして、見られた拍子に、ふらりと動いて、背後（うしろ）向きに横へ廻る。

パッパッと田舎の親仁（おやじ）が、掌（てのひら）へ吸殻を転がして、煙管（きせる）にズーズーと脂（やに）の音。くく、とどこかで鳩の声。茜（あかね）の姉（あねえ）も三四人、鬱金（うこん）の婆様（ばさま）に、菜畠（なばたけ）の阿媽（かかあ）も交（まじ）って、どれも口を開けていた。

が、あ、と押魂消（おったまげ）て、ばらりと退（の）くと、そこの横手の開戸口（ひらきどぐち）から、艶麗（あでやか）なのが、すうと出た。

本堂へ詣（まい）ったのが、一廻りして、一帆の前に顕（あら）われ

たのである。
すぼめた蛇目傘（じゃのめ）に手を隠して、
「お待ちなすって？」
また、ほんのりと花の薫（かおり）。
「何、ちっとも。……ゆっくりお参詣（まいり）をなされば可（い）い。」
「貴下（あなた）こそ、前（さき）へいらしってお待ち下されば可（よ）うござんすのに、出張（でっぱ）りにいらしって、沫（しぶき）が冷（つめた）いではありませんか。」
さっさと先へ行（ゆ）けではない。待ってくれれば、と云う、その待つのはどこか、約束も何もしないが、もう

こうなっては、度胸が据って、

「だって雨を潜って、一人でびしょびしょ歩行けますか。」

「でも、その方がお好な癖に……」

と云って、肩でわざとらしくない嬌態をしながら、片手でちょいと帯を圧えた。ぱちん留が少し摺って、……薄いが膨りとある胸を、緋鹿子の下〆が、八ツ口から溢れたように打合わせの繻子を覗く。

その間に、きりりと挟んだ、煙管筒？ ではない。象牙骨の女扇を挿している。

今圧えた手は、帯が弛んだのではなく、その扇子を、

一息探く挿込んだらしかった。

五

紫の矢絣に箱迫の銀のぴらぴらというなら知らず、闇桜とか聞く、暗いなかにフト忘れたように薄紅のちらちらする凄い好みに、その高島田も似なければ、薄い駒下駄に紺蛇目傘も肖わない。が、それは天気模様で、まあ分る。けれども、今時分、扇子は余りお儀式過ぎる。……踊の稽古の帰途なら、相応したのがあろうものを、初手から素性のおかしいのが、これで

愈々不思議になった。

が、それもその筈、あとで身上を聞くと、芸人だと言う。芸人も芸人、娘手品、と云うのであった。

思い懸けず、余り変ってはいたけれども、当人の女の名告るものを、怪しいの、疑わしいの、嘘言だ、と云った処で仕方がない。まさか、とは考えるが、さて人の稼業である。此方から推着けに、あれそれとも極められないから、とにかく、不承々々に、そうか、と一帆の頷いたのは、しかし観世音の廻廊の欄干に、立並んだ時ではない。御堂の裏、田圃の大金の、とある数寄屋造り［＃「数寄屋造り」は底本では「敷寄屋造り」］

の四畳半に、膳を並べて差向った折からで。……もっとも事のそこへ運んだまでに、いささか気になる道行の途中がある。
一帆は既に、御堂の上で、その女に、大形の紙幣を一枚、紙入から抜取られていたのであった。
やっぱり練磨の手術であろう。
その時、扇子を手で圧えて、貴下は一人で歩行く方が、
「……お好な癖に……」
とそう云うから、一帆は肩を揺って、
「こうなっちゃもう構やしません。是非相合傘にして

頂く。」と威すように云って笑った。
「まあ、駄々ッ児のようだわね。」
と莞爾して、
「貴方、」と少し改まる。
「え。」
「あの、少々お持合わせがござんすか。」
と澄まして言う。一帆はいささか覚悟はしていた。
「ああ。」
とわざと鷹揚に、
「幾干ばかり。」
「十枚。」

と胸を素直（まっすぐ）にした、が、またその姿も佳（よ）かった。

「ちょいと、買物がしたいんですから。」

「お持ちなさい。」

この時、一帆は背後（うしろ）に立った田舎ものの方を振向いた。皆（みんな）、きょろりきょろりと視（なが）めた。

女は、帯にも突込（つっこ）まず、一枚掌（たなそこ）に入れたまま、黙って、一帆に擦違（すれちが）って、角の擬宝珠（ぎぼしゅ）を廻って、本堂正面の階段の方へ見えなくなる。

大方、仲見世へ引返したのであろう、買物をするといえば。

さて何をするか、手間の取れる事一通りでない。

煙草もう吸い飽きて、拱いてもだらしなく、ぐったりと解ける腕組みを仕直し仕直し、がっくりと仰向いて、唇をぺろぺろと舌で嘗める親仁も、蹲んだり立ったりして、色気のない大欠伸を、ああとする茜の新姐も、まんざら雨宿りばかりとは見えなかった。が、綺麗な姉様を待飽倦んだそうで、どやどやと横手の壇を下り懸けて、

「お待遠だんべいや。」

と、親仁がもっともらしい顔色して、ニヤリともしないで吐くと、女どもは哄と笑って、線香の煙の黒い、吹上げの沫の白い、誰彼れのような中へ、びしょび

しよと入って行く。

吃驚して、這奴等、田舎ものの風をする掏賊か、ポン引か、と思った。軽くなった懐中につけても、当節は油断がならぬ。

その時分まで、同じ処にぼんやりと立って待ったのである。

六

早く下りよ、と段はそこに階を明けて斜めに待つ。

自分に恥じて、もうその上は待っていられないまでに

なった。
　端へ出るのさえ、後を慕って、紙幣（さつ）に引摺（ひきず）られるような負惜（まけおし）みの外聞があるので、角の処へも出ないでいた。なぜか、がっかりして、気が抜けて、その横手から下りて、路（みち）を廻るのも億劫（おっくう）でならぬので、はじめて、ふらふらと前へ出て、元の本堂前の廻廊を廻って、欄干について、前刻来（さっき）がけとは勢（いきおい）が、からりとかわって、中折（なかおれ）の鍔（つば）も深く、面（おもて）を伏せて、そこを伝う風も、我ながら辿々（たどたど）しかった。
　トあの大提灯を、釣鐘が目前（めのまえ）へぶら下ったように、ぎょっとして、はっと正面へ魅（つま）まれた顔を上げると、

右の横手の、広前(ひろまえ)の、片隅に綺麗に取って、時ならぬ錦木(にしきぎ)が一本(ひともと)、そこへ植わった風情に、四辺(あたり)に人もなく一人立って、傘(からかさ)を半開き、真白(まっしろ)な横顔を見せて、生際(はえぎわ)を濃く、美しく目迎えて莞爾(にっこり)した。

「沢山(たんと)、待たせてさ。」と馴々(なれなれ)しく云うのが、遅くなった意味には取れず、逆(さかさま)に怨(うら)んで聞える。

言葉戦い合(かな)うまじ、と大手を拡げてむずと寄って、

「どこにしましょう。」

「どちらへでも、貴下(あなた)のお宜(よろ)しい処が可(よ)うござんす。」

「じゃ、行く処へいらっしゃい。」

「どうぞ。」

ともう、相合傘の支度らしい、片袖を胸に当てる、柄よりも姿が細《ほっそ》りする。丈がすらりと高島田で、並ぶと蛇目傘《じゃのめ》の下に対《つい》。で、大金《だいきん》へ入った時は、舟崎は大胆に、自分が傘《からかさ》を持っていた。

けれども、後で気が着くと、真打《しんうち》の女太夫に、恭《うやうや》しくもさしかけた長柄の形で、舟崎の図は宜しくない。

通されたのが小座敷《こざしき》で、前刻《さっき》言ったその四畳半。廊下を横へ通口《かよいぐち》［#ルビの「かよいぐち」は底本では「かよひぐち」］がちょっと隠れて、気の着かぬ処に一室《ひとま》ある……

数寄に出来て、天井は低かった。畳の青さ。床柱にも名があろう……壁に掛けた籠に豌豆のふっくりと咲いた真白な花、蔓を短かく投込みに活けたのが、窓明りに明く灯を点したように見えて、桃の花より一層ほんのりと部屋も暖い。

用を聞いて、円髷に結った女中が、しとやかに扉を閉めて去ったあとで、舟崎は途中も汗ばんで来たのが、またこう籠ったので、火鉢を前に控えながら、羽織を脱いだ。

それを取って、すらりと扱いて、綺麗に畳む。

「これは憚り、いいえ、それには。」

「まあ、好きにおさせなさいまし。」
と壁の隅へ、自分の傍（わき）へ、小膝（こひざ）を浮かして、さらりと遣（や）って、片手で手巾（ハンケチ）を捌（さば）きながら、
「ほんとうにちと暖か過ぎますわね。」
「私は、逆上（のぼせ）るからなお堪（たま）りません。」
「陽気のせいですね。」
「いや、お前さんのためさ。」
「そんな事をおっしゃると、もっと傍（そば）へ。」
と火鉢をぐい、と圧（お）して来て、
「そのかわり働いて、ちっと開けて差上げましょう。」
と弱々と斜（ななめ）にひねった、着流しの帯のお太鼓の

結目（むすびめ）より低い処に、ちょうど、背後（うしろ）の壁を仕切って、細い潜（くぐ）り窓の障子がある。

カタリ、と引くと、直ぐに囲いの庭で、敷松葉を払ったあとらしい、蕗（ふき）の葉が芽（め）ぐんだように、飛石が五六枚。柳の枝折戸（しおりど）、四ツ目垣。

トその垣根へ乗越して、今フト差覗（さしのぞ）いた女の鼻筋の通った横顔を斜違（はすっか）いに、月影に映す梅の楚（ずわえ）のごとく、大（おおい）なる船の舳（へさき）がぬっと見える。

「まあ、可（い）いこと！」

と嬉しそうに、なぜか仇気（あどけ）ない笑顔になった。

七

「池があるんだわね。」

と手を支(つ)いて、壁に着いたなりで細(ほっそ)りした頤(おとがい)を横にするまで下から覗(のぞ)いた、が、そこからは窮屈で水は見えず、忽然(こつぜん)として舳(へさき)ばかり顕(あら)われたのが、いっそ風情であった。

カラカラと庭下駄が響く、とここよりは一段高い、上の石畳みの土間を、約束の出であろう、裾模様(すそもよう)の後姿で、すらりとした芸者が通った。

向うの座敷に、わやわやと人声あり。

枝折戸(しおりど)の外を、柳の下を、がさがさと箒(ほうき)を当てる、印半纏(しるしばんてん)の円い背(せなか)が、蹲(うずく)まって、はじめから見えていた。

それには差構いなく覗いた女が、芸者の姿に、密(そっ)と、直ぐに障子を閉めた。

向直った顔が、斜めに白い、その豌豆(えんどう)の花に面した時、眉を開いて、熟(じっ)と視(み)た。が、瞳を返して、右手(めて)に高い肱掛窓(ひじかけまど)の、障子の閉ったままなのを屹(きっ)と見遣(みや)った。

咄嗟(とっさ)の間の艶麗(あでやか)な顔の働きは、たとえば口紅を銜(つ)と白粉(おしろい)に流して稲妻を描いたごとく、媚(なまめ)かしく且つ鋭いもので、敵あり迫らば翡翠(ひすい)に化して、窓から飛んで

抜けそうに見えたのである。
一帆は思わず坐り直した。
処へ、女中が膳を運んだ。
「お一ツ。」
「天気は？」
「可塩梅に霽りました。……ちと、お熱過ぎはいたしませんか。」
「いいえ、結構。」
「もし、貴女。」
女が、もの馴れた状で猪口を受けたのは驚かなかったが、一ツ受けると、

「何うぞ、置いて去(い)らしって可(よ)うござんす。」と女中を起(た)たせたのは意外である。

一帆はしばらくして陶然(とうぜん)とした。

「更(あらた)めて、一杯(ひとつ)、お知己(ちかづき)に差上げましょう。」

「極(きまり)が悪うござんすね。」

「何の。そうしたお前さんか。」

と膝をぐったり、と頭(こうべ)を振って、

「失礼ですが、お住所(ところ)は？」

「は、提灯(ちょうちん)よ。」

と目許(めもと)の微笑(ほほえみ)。丁(ちょう)と、手にした猪口を落すように置くと、手巾(ハンケチ)ではっと口を押えて、自分でも可笑(おかし)かっ

たか、くすくす笑う。

「町名、町名、結構。」

一帆は町名と聞違えた。

「いいえ、提灯なの。」

「へい、提灯町。」

と、けろりと馬鹿気た目とろでいる。

また笑って、

「そうじゃありません。私の家（うち）は提灯なんです。」

「どこの？　提灯？」

「観音様の階段の上の、あの、大（おおき）な提灯の中が私の家（うち）です。」

「ええ。」と云ったが、大概察した。この上尋ねるのは無益である。

「お名は。」

「私？　名ですか。娘……」

「娘子（むすめこ）さん。――成程違いない、で、お年紀（とし）は？」

「年は、婆さん。」

「年は婆さん、お名は娘、住所（ところ）は提灯の中でおいでなさる。……はてな、いや、分りました……が、お商売は。」

と訊（き）いた。

後に舟崎が語って言うよう――

いかに、大の男が手玉に取られたのが口惜いといって、親、兄、姉をこそ問わずもあれ、妙齢の娘に向って、お商売？　はちと思切った。

しかし、さもしいようではあるが、それには廻廊の紙幣がある。

その時、ちと更まるようにして答えたのが、

「私は、手品をいたします。」

近頃はただ活動写真で、小屋でも寄席でも一向入りのない処から、座敷を勤めさして頂く。

「ちょいと嬰児さんにおなり遊ばせ。」

思懸けない、その御礼までに、一つ手前芸を御覧に

入れる。
「お笑い遊ばしちゃ、厭(いや)ですよ。」と云う。
「これは拝見！」と大袈裟(おおげさ)に開き直って、その実は嘘だ、と思った。
すると、軽く膝を支(つ)いて、蒲団(ふとん)をずらして、すらりと向うへ、……扉(ひらき)の前。——此方(こなた)に劣らず杯(さかずき)は重ねたのに、衣(きぬ)の薫(かおり)も冷(ひや)りとした。
扇子を抜いて、畳に支(つ)いて、頭(つむり)を下げたが、がっくり、と低頭(うなだ)れたように悄(しお)れて見えた。
「世渡りのためとは申しながら……前(さき)へ御祝儀を頂いたり、」

と口籠(くちごも)って、
「お恥かしゅう存じます。」と何と思ったか、ほろりとした。その美しさは身に染みて、いまだ夢にも忘れぬ。
いや、そこどころか。
あの、籠(かご)の白い花を忘れまい。
すっと抜くと、掌(てのひら)に捧げて出て、そのまま、櫺子窓(れんじまど)の障子を開けた。開ける、と中庭一面の池で、また思懸けず、船が一艘(そう)、隅田に浮いた鯨のごとく、池の中を切劃(しき)って浮く。
空は晴れて、霞(かすみ)が渡って、黄金のような半輪の月が、薄(うっす)りと、淡い紫の羅(うすもの)の樹立(こだち)の影を、星を鏤(ちりば)めた

大松明(おおたいまつ)のごとく、電燈とともに水に投げて、風の余波(なごり)は敷妙(しきたえ)の銀の波。

ト瞻(みつ)めながら、

「は、」と声が懸(かか)る、袖を絞って、袂(たもと)を肩へ、脇明(わきあけ)白き花一片(ひとひら)、手を辷(すべ)ったか、と思うと、非(あら)ず、緑の蔓(つる)に葉を開いて、はらりと船へ投げたのである。

ただ一攫(ひとつま)みなりけるが、船の中に落つると斉(ひと)しく、礫(つぶて)打った水の輪のように舞って、花は、鶴の羽(は)のごとく舳(へさき)にまで咲きこぼれる。

その時きりりと、銀の無地の扇子を開いて、かざした袖の手のしないに、ひらひらと池を招く、と澄透(すみとお)る

水に映って、ちらちらと揺(ゆら)めいたが、波を浮いたか、霞を落ちたか、その大(おおき)さ、やがて扇ばかりな真白(まっしろ)な一羽の胡蝶(こちょう)、ふわふわと船の上に顕(あら)われて、つかず、離れず、豌豆(えんどう)の花に舞う。

やがて蝶が番(つがい)になった。

内は寂然(ひっそり)とした。

芸者の姿は枝折戸(しおりど)を伸上った。池を取廻(とりま)わした廊下には、欄干越(てすりごし)に、燈籠(とうろう)の数ほど、ずらりと並ぶ、女中の半身。

蝶は三ツになった。影を沈めて六ツの花、巴(ともえ)に乱れ、卍(まんじ)と飛交う。

時にそよがした扇子を留めて、池を背後（うしろ）に肱掛窓（ひじかけまど）に、疲れたように腰を懸ける、と同じ処に、肱（ひじ）をついて、呆気（あっけ）に取られた一帆と、フト顔を合せて、恥じたる色して、扇子をそのまま、横に背（そむ）いて、胸越しに半面を蔽（おお）うて差俯向（さしうつむ）く時、すらりと投げた裳（もすそ）を引いて、足袋の爪先を柔かに、こぼれた褄（つま）を寄せたのである。

フト現（うつつ）から覚めた時、女の姿は早やなかった。

女中に聞くと、

「お車で、たった今……」

明治四十四（一九一一）年二月

底本：「泉鏡花集成４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年10月24日第1刷発行
　　　２００４（平成16）年３月20日第２刷発行
入力：土屋隆
校正：門田裕志
２００５年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。